

インドネシア人看護師・介護福祉士についての
日本人大学生のイメージ
～ゲストプログラムによる偏見低減のメカニズム～

浅井 亜紀子

Japanese University Students' Image of Indonesian Nurses and Care Workers:
Prejudice Reduction Processes through the Class Guest Program

ASAI Akiko

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第5号 2014年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Fifth Issue, March 2014

キーワード：イメージ、偏見低減、インドネシア、看護師、経済連携協定

Keywords: image, prejudice reduction, Indonesia, nurse, EPA

要 旨

先行研究では、偏見低減の外的あるいは内的条件、およびそれらの相互作用について、実際の場面に即して十分に検討されているとはいえない。Pettigrew (1998) の「脱カテゴリー化」、「カテゴリーの顕在化」、「再カテゴリー化」の3段階説は、偏見低減の過程として注目される理論であるが、それらに影響を与える内的、外的要因との関係性について十分わかっていない。本研究では、日本・インドネシア二国間経済連携協定で来日したインドネシア人看護師候補者に焦点をあて、日本人大学生が彼らに接触する前後のイメージ変化とその過程を検討した。調査方法は量的研究と質的研究を併用するミックス法を用いた。授業前後のイメージ変化を、セマンティックディファレンシャル法 (SD) より分析し、さらに大学生のレポート記述をもとにイメージ変化の内的、外的要因を分析した。大学生は授業前には候補者に対し「清潔でない」「患者として不安」を感じていたが、授業後はその否定的な度合いが減った。この変化には、候補者を取り囲む「マクロな国や制度」の理解が関係していた。さらにステレオタイプの低減には、候補者の勤勉さや宗教への熱心さに対する敬意など「肯定的な情動」が喚起され、これには大学生自身の置かれた現状や自身との比較から生起していた。ゲストについてのマクロな次元の中での自他の理解を促す情報収集、授業での具体的な資料提示、内省の活発化の重要性が示唆された。

Abstract

Previous studies on stereotype reduction processes have not clearly identified contextual, individual factors, and their relationships in actual settings. Pettigrew's (1998) concepts of "de-categorization", "Salient category", and "re-categorization" are useful, but it is necessary to examine how these concepts actually work based on an actual setting of cultural contacts. This study examined the process of stereotype reduction, using the case of Japanese university students' image on Indonesian nurses, who came to Japan through the Indonesia-Japan Economic Partnership Agreement. Mixed method was employed: The students were asked to rate their images of Indonesians with the Semantic Differential Method before and after the class; also the students' reports were qualitatively analyzed.

The results showed that their images of Indonesians and Indonesian nurses were changed from negative to positive on almost all items. The stereotype reduction processes in micro, mezo, and macro levels were specified at one-time cultural contact. The micro-level process includes understanding of outer group, and positive emotional experiences, which facilitate "de-categorization" and "Salient category". "Re-categorization" was facilitated by the recognition of mutual roles of the students and the guests. As a mezo-level factor, class room environment setting is important to deepen the students' understanding of the outer group from the macro-level, by giving concrete information of the Indonesia nurses under the IJEP system.

1. 本研究の背景と研究課題

1. 1. インドネシア人看護師・介護福祉士受け入れの背景と先行研究

高齢化が進む日本は、将来介護や看護の分野で人手不足が予測される。2008年より二国間経済連携協定（EPA）の枠組みの中で「外国人看護師・介護福祉士候補者」（以下候補者）の受け入れが始まった。2008年にインドネシア（Indonesia-Japan Economic Partnership Agreement, 以下IJEPA）、2009年にフィリピンから受け入れが開始し、2012年にはベトナムとの提携が完了し受け入れの調整が行われている。3年の間に日本の国家試験を受験し合格すれば、滞在期間の限度なしに日本で働くことができるが、不合格であれば帰国しなければならない。インドネシア人については、1陣（2008年）の208名（看104名、介104名）を受け入れてから、2陣（2009年）362名（看173名、介189名）、3陣（2010年）116名（看39名、介177名）、4陣（2011年）105名（看47名、介58名）、5陣（2012年）101名（看29名、介72名）、6陣（2013年）156名（看48、介108名）までで累計1048名（看392名、介500名）を受け入れてきた（厚生労働省、2013年7月31日現在）。現在7陣の面接選抜が終わりジャカルタでの日本語予備研修が実施されている。

特別枠とはいえ、合格すれば滞在制限なしに日本で就労できるため、移民受け入れの可能性を開くことになる初めてのケースとして国内の注目を集めた。受け入れ当初より、制度上の問題が多く議論され（浅井・宮本, 2011; 安里, 2010; 山本, 2009）、受け入れ病院・施設の負担の軽減、国家試験制度の見直しが提案された。国際厚生事業団（JICWELS）の受け入れ施設や候補者への聞き取り調査、サポート団体や研究者の報告や提案を受けて、研修教育費の補助金交付、国家試験の見直しなど制度上の見直しが行われた¹。一方、候補者の日本体験についても次第に明らかになってきた。彼らが日本で直面する最も大きなストレスは、日本語と国家試験の勉強であり、候補者本人の動機（キャリア志向か異文化体験志向か）と受け入れ側の目的（国際貢献か労働力不足対応策か）がズレた場合に、候補者と受け入れ側のどちらかにストレスが生じていた（浅井・箕浦・宮本, 2012）。看護師の場合、母国では看護師として有資格であるが、日本では国家試験合格まで患者に直接ケアをすることが許されない看護助手の立場に、職業アイデンティティのゆらぎを感じていた（宮本・浅井・箕浦, 2011）。

このように、これまで候補者をめぐる研究は、「候補者」や受け入れ病院・施設側や制度の問題を中心に行われてきたが、一般の日本人は看護・介護人材の受け入れをどのように認識しているのだろうか。施設側から、候補者受け入れのメリットとして、候補者の笑顔や親しみやすさが、病院の患者やスタッフによい影響を与えるという報告が聞かれたが（浅井・箕浦・宮本, 2012）、一般の日本人はインドネシアやインドネシア人に対してどのようなイメージを持っているのであろうか。本研究では、日本人大学生のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者に対するイメージはどのようなものか、授業で候補者から直接インドネシアの国や文化や、日本体験を話してもらうことで、彼らのイメージや認識はどう変化するのか、また、その変化の要因を明らかにする。

1. 2. 外集団に対するイメージや偏見についての研究と問題

文化接触の研究分野において、外集団に対する偏見は、相互理解や関係性を阻む重要な要素として考えられてきた。

偏見の心理について、心理学者Allport (1961) は、偏見低減について接触理論を提唱し、接触による偏見の低減の条件として、(1) 接触集団の平等性、(2) 共通の目標、(3) 互いの協力関係、(4) 制度的環境の整備をあげた。Allport 以降の研究でもこの条件は多くの研究で検証されてきた。Allportが提唱した以外の条件として、「個人として知り合う機会」、「平等関係を良しとする社会規範」(Cook,1985) や「十分な時間と回数」、「協同活動」(Brown, 1995) などがある。しかし、Allportの接触理論をめぐるこれらの研究の多くは外的条件、とくに、集団間の関係性が中心となっており(メゾレベル)、個人内の要因(マイクロレベル)、接触を取り囲むより大きなマクロレベルでの条件の検討は十分でない。マイクロな個人の内的プロセスを扱った研究例としては、Fisk (1998) が協同学習によるステレオタイプ低減理由を動機により説明している。相手を正確に理解しようとするときは「理解」動機が高まり、他者を善意ある者として考えたいときは「信頼」動機が高まる。いずれの動機も偏見が低下をもたらすという。

より包括的に偏見低減の研究をレビューしたのはPettigrew (1998) である。彼は、偏見の低減過程の心理について、「脱カテゴリー化 (decategorization)」、「カテゴリーの顕在化 (salient categorization)」、「再カテゴリー化 (recategorization)」の段階モデルを提示した。「脱カテゴリー化」とは、外集団の構成員個人と接触することにより、その個人に好感をもつこと(イスラム教徒を「可愛い」と思っている日本人がある一人のイスラム教徒に出会い、その個人に好感をもつ段階)、「カテゴリーの顕在化」は、出会った個人を外集団の典型とみなし外集団全体に対するよい印象を一般化すること(一人のイスラム教徒との出会いから、「イスラム教徒全体」に対してよい印象を広げる段階)、「再カテゴリー化」は、内集団 (we) と外集団 (they) のカテゴリーを上位のカテゴリー (us) の仲間として認識させることで偏見の低減を図る(「イスラム教徒」も自分たちも同じ「地球人」であると認識する段階)とモデル化した。Pettigrew (1998) は、これらの3つの過程に影響を与えるものとして、参加者個人の「経験」や「性格」、「状況要因」、「社会・制度的文脈」、「時間」を提示した。マイクロとマクロな要因を含めている点が注目される。しかし、これらの3段階は、実際にはどのように進むのか、またそれらに関わる状況要因や個人の経験、マクロの要因との関係性について詳細は明らかにしていない。従って、先行研究では、偏見低減の外的あるいは内的条件、また双方の相互作用は十分に検討されているとはいえない。個人はどのような状況の中で、外集団の人々についてのイメージをもち、どういう認知、情動の反応から、そのイメージは変化していくのだろうか。

本研究では、偏見低減の過程を、外的条件と内的条件の両者に目を配りその関係性を検討していく。本研究では、授業で日本人大学生が、インドネシア人看護師候補者と接触し、国や日本体験の講義を聞く事例をもとに、授業前後でイメージや偏見がどのように変化し

たのか、変化はなぜ起こったのか、個人の内面や授業の状況、授業環境やマクロ要因など外的要因にまで目配りをしながら明らかにする。

2. 調査方法

2. 1. 調査対象者

調査対象者として最も適切なのは、インドネシア人看護師や介護福祉士にケアを受けている患者や入居者およびその家族であるが、個人情報や倫理上の問題から医療関係者からの許可を得るのが困難であるため、一般人として将来ケアを受ける可能性のある大学生を対象とする。大学生はA大学の「異文化コミュニケーション」の授業の受講生114名（男41名、女73名）平均年齢は19.5歳（大学2年生が62名、大学3年生51名、大学4年生1名）である。

2. 2. 手続き

本研究は、大学生のインドネシア人候補者の授業前後のインドネシアのイメージ変化とその過程を調べるために、量的アプローチと質的アプローチを併用したミックス法を採用した。ミックス法のなかでも、本研究は並存的トライアングレーションデザインを用いた。これは、量的データの収集分析と質的データの収集分析を同時に行い、それぞれの分析結果をもとに、解釈の段階でアプローチの統合を試みる方法である（抱井・稲葉, 2011）。量的アプローチとして、セマンティックディファレンシャル（Semantic Differential、以下SD）法を用いた。SD法は、Osgood（1964）により開発された方法で、ある対象や事象について対立する2つの形容詞を両極とし、その間を何段階かに分け、回答者がどの段階かを選ぶ方法である。この方法により回答者の対象についての大きなイメージを得ることができる。一方、質的データとして、受講者のインドネシア人のイメージ変化や授業で学んだことについての自由記述レポートを用いた。

手順は、まず、授業の2週間前に、受講生に調査の目的を説明し、データは研究のみに使用すること説明したあと、「インドネシア人」、「インドネシア人看護師・介護福祉士」のそれぞれのイメージについて、受講生が思いつく名詞、形容詞、動詞を自由に記述してもらった。回答の中から繰り返して使われていた形容詞をもとに「インドネシア人」について12個（例「肌が黒い—肌が白い」）、「看護師・介護福祉士」について12個（例「頼りない—頼れる」）を抽出した。それぞれの形容詞を対項目にし、7件法の評価項目のアンケートを作成した（例：「頼りない」3,2,1,0,1,2,3「頼れる」）。授業の1週間前に、このアンケートを実施し、さらに授業1週間後に同じアンケートを実施した。同時にインドネシア人候補者との授業で新しく得た知識、インドネシアや候補者についてのイメージがどう変化したのか、どうしてそう思ったのか理由を1200字のレポートに書いてもらった。

授業では、候補者2名（イスラム教の男性Dとキリスト教の女性M）と彼らの教育担当看護副部長を招いた。候補者と看護副部長が大学の授業に招聘されることについては、受け入れ病院の病院長の許可を事前に得て行った。候補者2名と筆者は、ゲストプログラムが

決定する前にすでに面接を3回実施していたが、本授業が決定してから2～3時間の会合を2回持ち、発表内容について話しあい、パワーポイントを共同で作成した。授業の60分を講義、残りは質疑応答にした。講義内容は、①EPAによる外国人看護師候補者来日の背景の説明、②看護師候補者2名と日本人看護師（受け入れ担当者）の紹介、③インドネシアの地理、民族、生活、教育、宗教についての講義、④候補者自身の来日動機、日伊の病院の違い、国家試験の勉強、将来のキャリアビジョンについてである。①と②は筆者が担当し、③と④は候補者2名が担当を決めて行った。

2. 3. 分析

SD法により得られた授業前後のアンケート114名分を、個人別に各項目の授業前後の数値をエクセルに入力した。IBM SPSS Statistics 20にエクセルデータを読み込み、記述統計を分析し、さらに授業前後の変化が統計的に意味があるか否かを判断するために、t検定を行った。

大学生のレポートの記述部分の分析には、グラウンデッドセオリーアプローチを用いた。グラウンデッドセオリーはグレイザーとストラウス (Glaser & Strauss, 1967) により提唱されたものであるが、本研究では修正版グラウンデッドセオリー (木下, 1999) を用いた。データをコーディングしカテゴリー化し、そこから仮説を生成していく方法である。レポートに書かれてある授業前からイメージが変化の理由に関連する記述を集め、それにカテゴリー名をつけた。たとえば、受講生は、「実際に私は祖母の介護をしたことがあるが大変だった」や「僕自身もバイトですが外国人留学生と働いたことがあり言語の壁に直面した」と、自身の経験に照らして看護師の経験を理解しようとしていた。自分の経験と比較しながら相手を知っていくプロセスを、「過去・現在の経験との比較」というカテゴリーにした。このようにステレオタイプの低減のプロセスにカテゴリーを作り、これらカテゴリー同士の関係をレベルや時間軸の面から検討し、偏見低減のプロセスについて仮説を生成した。

3. 結果

3. 1. 日本人大学生のインドネシア人イメージ

受講生の、インドネシア人やEPAによる看護・介護福祉士受け入れについての事前の知識は概して低かった。インドネシアに行ったことがある人、また、インドネシア人に会ったことがある人はいなかった。インドネシアから看護師・介護福祉士が来日していることを知っている者は全体の15%と僅かであった。そのうちの64.7%はテレビ、29.4%が他の授業、11.8%は新聞を通じて知っていた（複数回答）。EPAが具体的には何を意味するかについては、ほとんどの学生が知らなかった（知っていたのは1.8%）。受講生の多くは、インドネシア看護師、介護福祉士については知識がなく、今回の授業が初めて対象を知る機会であった。

「インドネシア人」のイメージは、授業前のイメージは、外見については「肌が黒い」、「目

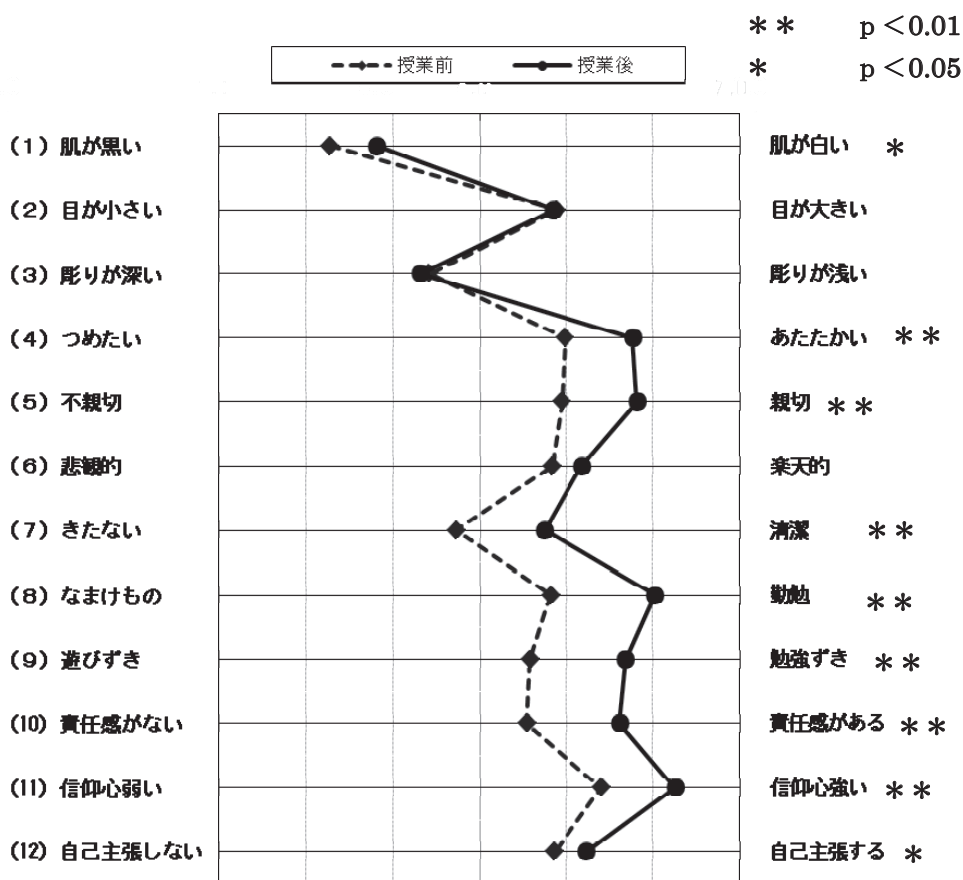


図1 「インドネシア人」の授業前後でのイメージ変化

が大きい」、どちらかという「彫りが深い」と捉えていた（図1参照）。授業後は、「肌の黒い」程度がやや低くなった。

インドネシア人の内面については、「あたたかい」「親切」「信仰心が高い」と全体的に肯定的なイメージを持っていた。しかし「きたない」という否定的なイメージもあった。授業後は、「あたたかい」「勤勉」「勉強好き」「責任感がある」「信仰心が高い」のいずれの項目もその程度が有意に高くなり、「きたない」から「清潔」なイメージに好転した。

「インドネシア人看護師・介護福祉士」のイメージ（図2参照）は、授業前は、「真面目」「勉強熱心」と比較的肯定的であったが、日本への適応については、「日本語に苦労」している、「日本で心細い」、「職場になじんでいない」と、日本の環境や職場で苦労しているというイメージがあった。また、自分や家族が患者としてインドネシア人看護師や介護福祉士からケアを受けることに対しては、どちらかという「不安」であり、「抵抗がある」と感じており、「患者にとって良い」とは感じていなかった。

授業後は、多くの項目でイメージが好転し、内面については、より「頼れる」、「真面目」、

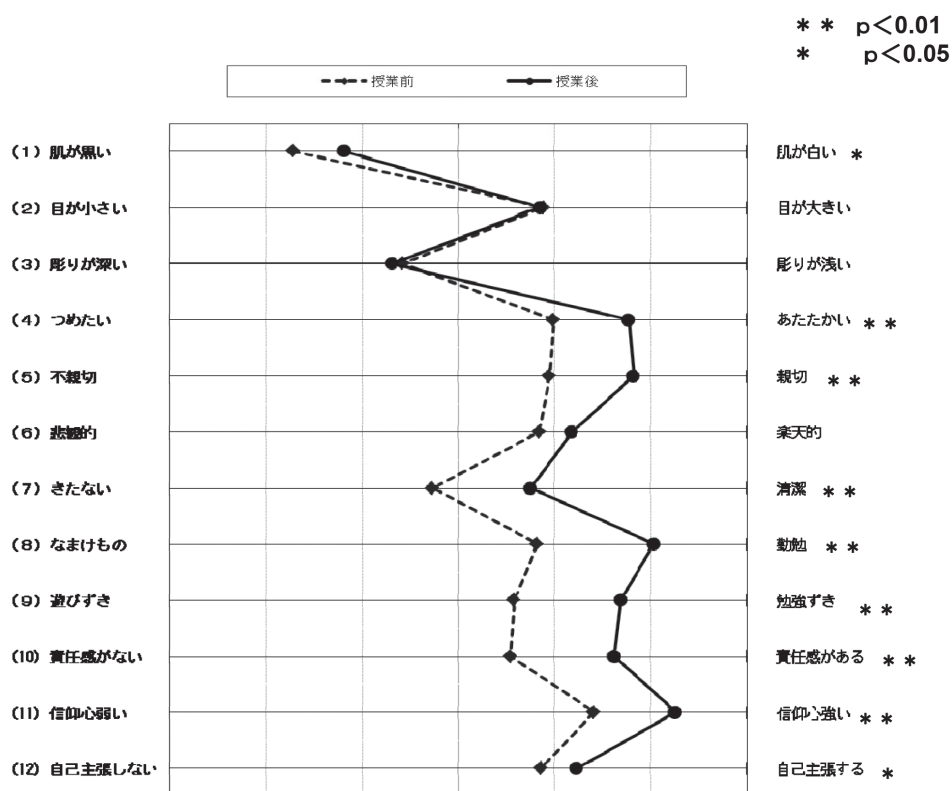


図2 「インドネシア人看護師・介護福祉士」の授業前後でのイメージ変化

「親しみやすい」、そして「勉強熱心」な人々であるというイメージに変わった。日本への適応についても、「仲間がいる」、「日本で楽しんでいる」、「職場になじんでいる」とより高い方に变化した。授業前に最も低かった「日本語に苦労」の項目は授業後も変化はなかった。また、患者としてケアされることについては、授業後は、患者として「安心」でき、「抵抗なし」の方向へ、また「患者にとってよい」という方向に有意に変化していた。

3. 2. イメージの変化についての質的分析

前述のアンケート結果は、ゲストとの接触によって、大学生のインドネシアに対するイメージが好転したことを示している。しかし、アンケート調査からは、その変化の理由はわからない。また、事前の大学生のイメージの項目をもとに項目をたてたため、実際に授業を受けた後に出てきた新たなイメージについては捉えきれていないかもしれない。また、そのようなイメージの変化はなぜ、どのように起こったのかについても明らかではない。従って、大学生がインドネシア人と接触する前のイメージとその理由、また、授業後に再構築されたイメージと、その根拠をみるために、学生の授業のレポート記述を分析した。レポートの記述の中から、授業で接触する前にインドネシア人に対して抱いたイメージと

その理由、授業で接触して持ったイメージとその理由が書かれた記述部分を抜き出してカテゴリー化した。なお、授業後のレポート114名の記述には、インドネシア人への否定的な記述はみあたらなかった。

3. 2. 1. 授業前の「インドネシア人」「看護師・介護福祉士」のイメージとその根拠

受講生は、授業後のレポートで、授業前にインドネシア人候補者に対し「きたない」と感じたり、患者として「不安」を感じたり「抵抗」感を持っていたと報告していた。こうした否定的なイメージを持った理由として、「外集団に対する知識不足」と「命に関わる看護介護の特殊性」が見出された。

アンケート結果に示されるように、受講生のほとんどはインドネシアの国や人々、また、日本の医療看護の実情やインドネシア人看護師・介護福祉士について知識がなかった。受講生の中にはインドネシアとインドとを混同している者もいた。このインドネシアについての限られた知識が否定的なイメージを生んだと考えられる。

「私はこの授業を受ける以前は、ただ単に外国から看護師、介護福祉士が日本に来日しているということしか知らなかった。授業前に行った（SD法の）アンケートにも書いたように、さまざまな医療・介護の現状を知らなかったため、外国人医療・介護従事者が日本で働くことに対して正直なところ不安の方が大きかった。」（大学3年生女子）

さらに看護や介護は、「命をあずかる」特殊な領域である。留学生が日本で勉強したり、ビジネスマンが日本で仕事をしたりするのは違い、日本人の命を守る重い責任と危険性を伴う職業である。このような看護・介護の特殊性ゆえに、患者としての不安が強く感じられる。次の受講生の記述には、受講前に外国人看護師受け入れの現状への自身の知識不足、命をあずかる医療の領域で外国人が働くことへの不安が表れている。

「看護師や介護福祉士は、常に命と隣り合わせで働く職業だと私は思っている。そのような環境の中、文化や言語が異なった外国人従事者の方に家族、または自分自身を任せることができるのかと考えたからだ。」（大学3年生女子）

「看護や介護医療という命に関わる仕事を、家族を養うお金を稼ぐことが目的で来た人たちにできるのか、という疑問がありました。」（大学3年生女子）

生命に関わる「看護医療」という特殊な分野に、外国人に任せてよいのか、出稼ぎ感覚の人が来てしまってよいのか、という疑問を生んでいる。このように外集団への偏見は、生命に関わる重要な「看護医療」領域での外国人受け入れへの疑問から生まれている。

3. 2. 2. 授業後のインドネシア人のイメージ変化の原因についての質的分析

授業後の受講生のインドネシア人イメージについて、より具体的なイメージの中身について知るために、受講生のレポートの記述をもとに分析した。イメージについての授業後の受講生の記述を抜き出し、第一カテゴリーとし、さらに第二カテゴリーとしてまとめるとイメージは6つあった（「勤勉・努力」「強い宗教心」「明朗・ユーモア」「思いやり」「仲間」）（表1参照）。

(1)「勤勉・努力」は、大半の受講生のコメントに書かれていたが、アンケート結果とも一致する。コメントの例としては、「異国で、外国語を学び国家試験合格をめざして努力している」「日本語を使いこなせていたので努力したのだろう」「国家試験が受からなければ帰国という厳しい制度の中で頑張っている」などである。

「看護師候補者の多くの方が、日本語をほとんど話せない状態で来日し、半年間の日本語研修を受けただけで実務に入り、そして日本語の勉強をしながら働く。言語に不安を持ちながら、新しい場所で慣れない仕事をするのはとても不安でいっぱいだと思います。（中略）施設で働くためには、少なくとも日常会話レベルが必要であり、さらに看護師という仕事は信頼関係も大切だと思うので、看護師候補者の方は私たち日本人よりも何十倍の努力が必要だと感じました。」（大学3年生女子）

「お二人に関してはかなりの努力家であると感じました。今の私には残念ながら二人の真似はできません。看護助手として働きながら、外国語の勉強もして、国家試験の勉強もして、普段の生活も怠らないでしっかりして、お祈りもして早起きもする。こんないくつものこととの両立をして、笑顔も絶やさなくて楽しそうに生活をしているのが素晴らしいなと思いました。」（大学2年生女子）

このように、働きながら国家試験合格を目指さなくてはならない制度的枠組みの中で、日本

表1 授業後のインドネシア人イメージ（レポート記述分析結果）

第一次カテゴリー	第二次カテゴリー
仕事熱心、辛抱強い、日本語理解の努力、日本語で話す意欲、勇気、ひたむき、情熱、苦勞、本気、まっすぐ、しっかり、目的意識	勤勉・努力
祈り、断食、食事の制限真面目、熱心、信仰心、本気	強い宗教心
笑顔、コミュニケーション、ユーモア、積極性、元気がでる	明朗・ユーモア
家族思い、穏やかさ、誠実さ、あたたかさ、優しさ	思いやり
助け合える、受け入れていきたい、信頼関係	仲間

語という言葉の壁に直面しながら頑張っている姿に勤勉さを感じている。

(2)「宗教心」も、授業後のレポートで多く言及されていた。イスラム教徒の候補者Dはイスラム教徒としてのアイデンティティを強く持っており、毎日の宗教的实践を欠かさない。講義の中で候補者Dは、滞在2年目の1日のスケジュールを具体的に紹介した(図3参照)。早朝3時に起きて、身体を清め(ウドゥ)、祈りをしたあと、朝食、シャワー(マンディ)、国家試験に向けての勉強をする。弁当を作り、午前は仕事、昼に昼食、2回目のウドゥと祈り、午後は勉強、3回目のウドゥと祈り、帰宅して4回目のウドゥと祈り、夕食、勉強。就寝前に5回目のウドゥと祈り。受講生は宗教心の強さに印象深く感じていた。

「信仰心がとても高い。イスラム教信者がほとんどのインドネシアではお祈り専用のカーペットをいつでもどこにでも持って行き、決まった時間にお祈りをする。こういった信仰心が高い背景には3歳という幼い年齢から両親に宗教を教わったり、宗教専門の塾のようなところへ学びに行ったりという教育がなされた結果だということがよくわかりました。コーランはアラビア語で書かれていて読みあげるとなんだか歌のように聞こえました。また食事の制限(ラマダン、豚肉禁止など)もあり、宗教について関心の低い日本では宗教上の理由から食べられないということに対する理解がやはり少なく、食事がとても大変だという印象を受けました。」(大学3年生女子)

1日5回の祈りを実践しながら、仕事と勉強を両立するスケジュール、またイスラム教の断食、金曜日の礼拝、食べ物(アルコール、豚肉)の規則を守り実践していることに驚きを感じていることがわかる。

D君の一日(ある月曜日)

3:00 ~	起床、ウドゥ(清め)・祈り
5:00~6:00	勉強
6:00~6:45	弁当をつくる
6:45~7:00	朝ごはんを食べる
7:00~7:15	シャワー(マンディ)
8:15~12:30	病院で仕事
12:30~13:15	昼ごはん、ウドゥ、祈り
13:15 ~15:30	病院で仕事
15:30~17:00	ウドゥ、祈り、休憩、勉強
17:00~18:00	帰宅、ウドゥ、祈り
18:00~19:00	夕食
19:00~21:00	ウドゥ、祈り、勉強
21:00 ~	睡眠

図3 候補者の一日の流れを説明する授業資料

(3) インドネシア人看護師に対する「明朗・ユーモア」というイメージは、授業後のレポートの記述に繰り返して見出された。これらの形容詞は、授業前の受講生の自由記述にはなかったため、アンケートの形容詞リストには含まれていなかった。

「二人とも最初から最後まで笑顔で過ごしていたのが印象的で、インドネシアとその国の人に良い印象を持つようになりました」。(大学3年生男子)

「明るい」印象は、授業のプレゼンテーションでの「ユーモア」や「積極性」からも感じられていた。候補者Dが授業の最後に、自分の将来の夢を語ったとき、「日本人は少子化で子どもが少ないですので、私はたくさん子どもをつくって、日本の社会に貢献したいです」と話した。この言葉にクラスで笑いと拍手が起こったが、このような「ユーモア」に、受講生は「明るさ」を感じた。

(4)「思いやり」は、家族を養うために日本に来る候補者の家族への思いやりの強さ、また、患者に対しての心づかい、講義からの印象で「穏やか」「あたたかな」「優しい雰囲気」として記述されていた。

「自分の家族を自分で介護をしないのがわからないという言葉が心に残りました。本当にその通りだと思います。そんな冷たい心の日本人よりも、自分の家族は自分で介護するのが当たり前と思ひ、外国人である日本人までも介護をしてくれる、そんな優しい心をもった外国人医療従事者の方が熱心に取り組んでくれるのではないかと思います。」(大学2年生男子)

「インドネシアの看護師さんたちの話をきいたとき、コミュニケーションが大変そうなので問題になるのではないかと思います、実際はあたたかく対応しているというので安心した。」(大学3年生女子)

「穏やかさ」や「あたたかさ」、家族や患者への「ケア」といった意味が「思いやり」のイメージに含まれる。

(5)「仲間」というイメージは、「日本にとってプラスになる」「互いに助け合える」「もっと受け入れていきたい」という記述から得られたイメージである。

「今の日本が外国の方に頼らなければいけない程、医療や介護の人手不足であることもよく分かりました。高齢者の中には、医療や介護を受けたくてもなかなか受けられない方が大勢いると聞いたことがあります。インドネシアの方が、家族や自分たちの生活の

ために日本に来るのならば、私たちにとっても人手の不足している医療や介護の仕事を
して貰う事で、お互いを助け合っているんだなと思いました。」(大学2年生女子)

インドネシア人看護師候補者を、高齢化が進む日本にとって、「お互いに助け合える」人々として表象している。日本人にとって必要な仲間として認めているこのイメージは、偏見低減のプロセスの鍵となるものとして注目される。

以下の節では、なぜイメージの変化が起こるのか、偏見が解消されていくプロセスについて分析を進める。

3.3. 偏見低減のプロセスについての分析

受講生の候補者へのイメージは、授業前には「きたない」、患者として「不安」や「抵抗感」があったが、授業後には「勤勉・努力」や「強い宗教心」や「明るい」「思いやり」「仲間」としての良いイメージに好転した。これらの変化に関する要因のカテゴリーは、大きくマイクロ、メゾ、マクロの次元に分類された。さらにこれらを時間軸に並べると図4のようになった。細い線で囲まれたカテゴリーは、Pettigrew (1989) がすでに図式化したものである。太い線で書かれているカテゴリーが、本研究で見出されたものである。これらのプロセスを、順を追って説明していく。

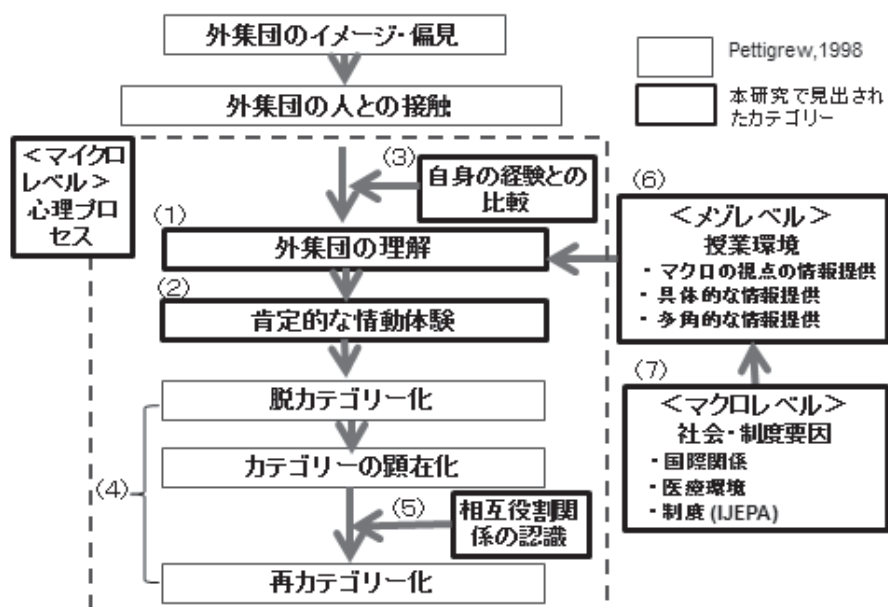


図4 偏見低減のプロセス

(1)「外集団の理解」

受講生の「不安」や「抵抗」の原因の一つは、「外集団の知識の不足」であった。これらの不安が解消に向かい、肯定的に変わるためには、外集団への深い理解が必要である。「外集団の理解」には、二つのレベルの理解が鍵となっていた。一つにはマクロの国や制度の理解、もう一つは外集団の多様性についての理解であり、これらは(6)の授業における具体的な情報提供によって促進される。

多くの受講生は外国人医療従事者が日本で働いていることを知らなかった。知っていても、EPA協定が日本とインドネシアの間になぜ締結されたのかその背景について知識はなかった。日本はインドネシアの天然ガスや天然ゴムなどの資源を輸入し、インドネシア側への日本の車や電気製品などの工業製品の輸出をしており、日本とインドネシアの関係は良好である。日本の高齢化社会に伴い看護師・介護福祉士不足が深刻化する一方、インドネシア側は看護学校で優秀な人材を育てても国内の看護師ポスト不足のため海外で仕事を求めるしかない。EPAによる医療人材の受け入れは、医療事情の悪いインドネシア側から始まったとはいえ、両国の必要から始まった制度上の人の移動である。さらに日本は高度人材しか受け入れない入管上の政策から、国家試験合格を目指す特別枠で医療人材を受け入れた(図5参照)。従って日本滞在は国家試験合格を目指す候補者として滞在することになる。この制度の中の候補者の立場についての理解が、受講生たちの偏見を取り除く助けになっている。

「今回2人のインドネシア人医療従事者のお話を聞いて、そう簡単なものではないということも理解できた。働きながら3年の間に国家試験に合格しなくてはならないという条件は、とても厳しいものだと感じた。(中略) こういった背景を知った上で私は、外国人医療・介護従事者に対する不安がなにも知識がなかった授業を受ける以前よりも少なくなったと思う。日本の国家試験に合格するため、日本で働くために学ぶ従事者の姿を見てそのように感じた。」(大学3年女子)

インドネシアと日本両国の医療人材や経済事情が背景とするEPA制度の理解は、候補者たちが、看護助手として働きながら、国家試験合格を目指して勉強しなければならない状況の理解を促していた。候補者は来日後3年間(介護福祉士候補者は4年間)または延長1年が認められれば計4年以内に、母国とは異なる言語で国家試験レベルの試験をクリアすることを目指さなければならない。候補者が「思った以上に大変」で「厳しい」状況に置かれていう理解が、偏見低減を導いていた。

IJEPAの背景

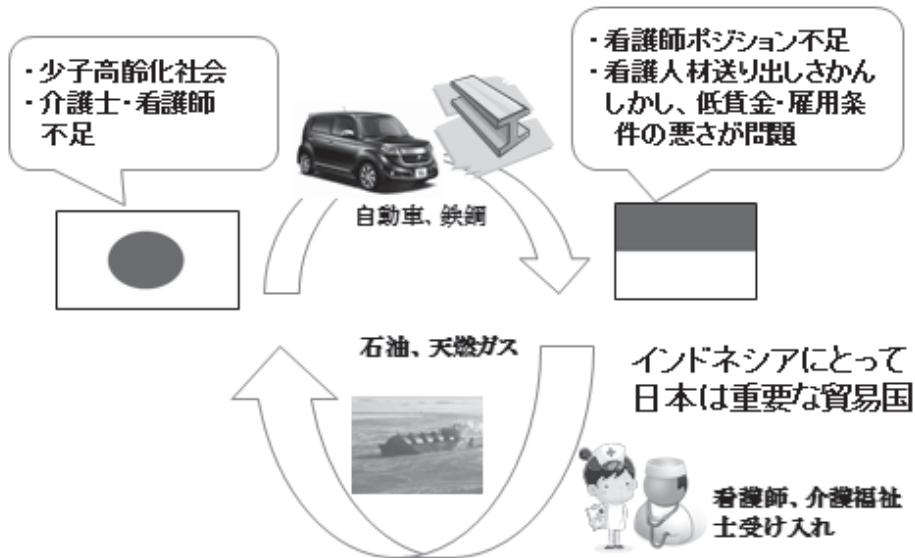


図5 IJEPAの構造 (授業時に用いたパワーポイントより)

もう一つの外集団の理解は、外集団の多様性についての理解である。受講生の外集団に対する多様性への気づきを促し、イメージを変化させていた。受講生はインドネシア人に対して「肌が黒い」「きたない」と感じていたが、授業後は「肌が白い」「清潔」の方へ変化した。候補者がインドネシアの多様な民族を紹介し、肌の濃いパプアの人々から、比較的肌の白いジャワの人々まで多様な人種がいるという写真を用いた説明により、受講生は、「島によって外見が違う」「多民族で一種族ではなく、ジャワ人、スマトラ人、パプア人など様々な人がいて、多種多様」「宗教も様々」と、インドネシアの多様性を理解した。同時にジャワ出身の候補者たちの外見も、「肌が黒い」という偏見を崩す一因となったと考えられる。このような外集団についての「多様性の認識」が進み、自分が前にもっていたイメージは現実の多様性の一部でしかないという認識が、脱カテゴリー化へと向かう。

(2)「肯定的な情動体験」

「外集団の理解」が「偏見低減」に結びつくためには、「肯定的な情動体験」が重要な役割を果たしていた。受講生たちは候補者の話の内容や態度から、「勤勉で努力家」「強い宗教心」をもち「明るさ・ユーモア」のある人々と肯定的な情動を感じていた。この肯定的な情動が偏見を低減させていた。

次の学生は、自身の家族の介護の大変さを経験し外国人にできるのかという疑問を感じていたが、インドネシア人の明るさや日本語を学ぶ努力を見てその疑問が解消されたという。

「実際に私は祖母の介護をしたことがあります、介護対象者が同じ日本人で言葉が通じて、たとえ身内であっても、本当に辛くて大変なことです。言い方が悪いかもしれませんが、その大変なことを、家族を養うお金を稼ぐことが目的で来た人たちにできるのか、という疑問がありました。しかし、実際に病院で働いているMさんとDさんのお話を聞いて、私の中の疑問が解消されてきているように思います。MさんとDさん第一印象としてとても穏やかそうな人たちだな、という感じがしました。そして、(中略)Dさんがインドネシア語と日本語を混ぜて話してしまったときは、おもしろかったですし、日本語を勉強している証拠だろうと思いました。お二人とも最初から最後まで笑顔で過ごしていたのが印象的で、インドネシアとその国の人に良い印象を持つようになりました。また、看護師の方がお二人のことを話しているのを聞き、1年間努力してきたことが感じられ、私も努力するところを見習わなければいけないと思います。」(大学3年生女子)

授業では、候補者が日本語で講義をしたが、日本語を十分使いこなしていたわけではなく、思わずインドネシア語が出てしまう場面もあった。しかし、懸命に日本語で話す姿は、努力や勤勉という良い印象を与えた。

さらに、受講生の「肯定的な情動」を生起させたのは、候補者たちの「強い宗教心」であった。

「Dさんの月曜日のスケジュールを見て『お祈り』の多さをみて、文化をととても大事にしているんだなと思いました。朝3時に起きてお祈りと勉強をするところが、私には真似できない一生懸命な心だと思いました。尊敬します。」(大学3年生女子)

「私は、普段何気なく立ち寄ってハンバーガーを食べているが、宗教からのルールとして肉を食べることができないことや、絶食など、日本の文化とは全く異なる価値観や文化を持って、私たちの生活の中に入り、さらに文化、言葉の違う相手とのコミュニケーションを重要視されている職に就くために、働きながら勉強しているなんて、とてもすごいし、難しいことだと思う。」(大学3年生男子)

「宗教に対しても日本と違って大切にしているんだなと思いました。私たちの世代で宗教を意識して生活している人はほとんどいないと思います。1日に5回のお祈りをしたり断食があったり、Dさんは豚肉を食べなかったりと昔から受け継がれる宗教、文化を大切にしていることは良い事だと思います。日本の若者は宗教や自分の国の文化に対して、大切に思う気持ちが薄いなと思いました。」(大学3年生女子)

多くの受講生は、宗教行事に参加することはあっても、宗教について意識し深く考える

ことをしない。受講生はインドネシア候補者に自身との違いを感じながらも、候補者が宗教を自身の核として重要に捉え、異国にあっても、アラビア語でコーランを読み、祈り、実践している姿に、驚きと尊敬という肯定的な情動を感じていた。さらに、そのような実践を大事にしながら、なおかつ国家試験に向けて勉強しているということにより敬意を感じている。インドネシア人と日本人が互いに学びあえる最も重要な差異は、この宗教に対する考えや実践といえるかもしれない。

(3)「自身の過去・現在の経験との比較」

候補者に対する「肯定的な情動」が喚起される過程には、「自身の過去・現在の経験との比較」が重要な役割を果たしていた。自身の経験と、候補者の経験とを重ね合わせたり、比較したりすることで、候補者の体験への理解を深めていた。候補者が病院の教育担当看護部長と良好な人間関係を築いている様子を見た時に、自身のアルバイトや留学体験との比較をして、候補者の体験を理解しようとしている。次の例では、アルバイト先の留学生との間で、言語や考え方の違いが原因で人間関係を築く難しさが述べられている。

「僕自身も、バイトですが外国人留学生と働いたことがあります。言葉の壁や仕事に対しての考え方の違いがすごくありました。正直、人間関係を築くことはとても難しかったです。その点、候補者Dさんたちと日本人看護師たちの間にはとても信頼関係がある事を、見てとらえることができました。それはお互いが仕事に対して本気で取り組んで、本気で向き合っているのだなと感じました。」 (大学3年生男子)

次の例は、自分の留学経験に比べ、国家試験の勉強をしながら働く候補者の苦労の大変さを思い、彼らの行動力や積極性に感心している。

「私もカナダへ留学し、さまざまな価値観を持つ人々とのコミュニケーションをとることの難しさを知った。中でも”日本は・・・”という種類の問いに対して、なんと答えればいいのか迷い、あいまいなままその場をやり過ごしてしまった経験がある。そんな問題とは比べ物にならないほどの困難を彼らは抱えていると考える。それらの問題を抱えながら国家試験を受けるための準備と研修を行っていて、一度の試験のためにプレッシャーもとても大きいものだと感じた。彼らは明るく顔には出さなかったけれど今に至るまでの道のりと苦労は私たちが考えているものとはレベルが違うと話を聞いていて感じた。確かに給料や福利などは、日本は安定しているし、高度なレベルのサービスを受けることができるかもしれないが、家族に会えない、出稼ぎとなると、私自身のこととして考えると、積極的にできないかもしれないと考えた。そのため、彼らのポジティブな行動力は素晴らしいと感じた。」 (大学3年生男子)

自分の留学の苦勞に比べ、候補者たちが期限内に国家試験に合格しなければならないプレッシャーは大きいと認識し、これが「肯定的情動に結びついている」。

(4) 「脱カテゴリー化」「カテゴリーの顕在化」「再カテゴリー化」

候補者に対し「肯定的な情動体験」を感じることで、それまで感じていた「不安」「きたない」といった否定的なイメージは好転し、「脱カテゴリー化」が起こっていた。授業で接触したのは二人の候補者のみであるが、この二人との接触により、「インドネシア人看護師候補者」のイメージ、そして「インドネシア人」全体に対するイメージまでが肯定的になったのはアンケート結果が示すとおりである。ここでは「カテゴリーの顕在化」が起こっているといえよう。受講生たちは「二人の経験をきいて、インドネシア人へのイメージが変わった」「インドネシア人の二人の話聞いて、インドネシア人のまじめさを改めて実感することができた。そのまじめさの中には、明るく元気でユーモアがある。この二人だけではなく、インドネシアの全ての人々を尊敬する」と述べている。

「カテゴリーの顕在化」から「再カテゴリー化」へと進むためには、外集団と内集団とを分ける境界が消え、より高次の集団として統合される必要がある。本研究では、インドネシア人看護師候補者を「仲間」と捉えるイメージが見出されたが、これは、候補者を「外集団」(よそ者)ではなく「内集団」の一員として捉えていることを示している。

(5) 「相互役割関係の認識」

前述のように、外集団の構成員である候補者を、「内集団」として認識することで、「再カテゴリー化」が進んだことがみてとれる。これを促すのは、「相互役割関係の認識」であろう。授業後のレポートには、候補者に対し、日本人の患者や高齢者のケアをしてくれる必要かつ信頼できる人たちとみなす受講生の記述があった。「インドネシアの方が、家族や自分たちの生活のために日本に来るのならば、私たちにとっても人手の不足している医療や介護の仕事をして貰う事で、お互いを助け合っているんだなと思いました」(再引用)。自身や家族を看護・介護してくれる未来の重要なメンバーとして考えるためには、互いのニーズや役割を補完する相互関係の認識が介在する。候補者は単に内集団に移動してきた人ではなく、内集団のメンバーに看護やケアを与える人であり、自分たちも彼らをサポートする立場にあるという相互依存の意識が生まれる。「私たち」に相対する「彼ら」ではなく、「われわれ」「仲間」という、両者を内包するより大きな集団の認識により「再カテゴリー化」が促される。

(6) 授業環境要因 (メゾレベル)

受講生が外集団についての理解を深めるためには、授業でのマクロ次元を含めた具体的な情報提供のあり方が必要である。本研究の授業では、候補者の生活がわかるように、一日の流れを時間に従って具体的に提示された(図3)。また、候補者がどのような制度のも

とでやってきたかというマクロの視点からの説明を図解入りで説明するなど、背景の情報提供を授業で行われた（図5）。候補者だけでなく、候補者を受け入れている病院の教育担当者を招くなど複数の情報ソースを使うことで、外集団についての具体的で多視点からの情報を提供したといえる。

(7) 社会・制度要因（マクロレベル）

候補者たちの仕事や生活についての理解を深めるためには、彼らがなぜ日本に来るようになったのか、候補者の背後にあるマクロレベルの要因の存在が必要である。候補者が来日した背後には国際関係がある、その背景にはインドネシアや日本の医療環境、EPA制度がある。候補者を取り囲むマクロについての認識と、それについての情報提供を受講生に行うことで、偏見の低減が進む。

4. 偏見の低減プロセスについての考察

本研究における受講生のもつインドネシア人看護師・介護福祉士のイメージとその変化から得ら、偏見の低減をまとめると以下のことがいえる。

- (1) インドネシア人看護師・介護福祉士について、受講生は十分な知識を持っていない中で否定的なイメージをもっていた。しかし、授業後に肯定的になった。
- (2) イメージの変化の過程には、「外集団の理解」による「肯定的な情動体験」があった。
- (3) 「外集団の理解」は、「マクロな視点からの情報」と「多様な情報」を提供することで促された。
- (4) 「肯定的な情動体験」は自身の「過去や現在の体験との比較」から生起していた。
- (5) 「肯定的な情動体験」は、外集団への初期の否定的イメージを好転させ、「脱カテゴリー化」「カテゴリーの顕在化」「再カテゴリー化」を促していた。
- (6) 「再カテゴリー化」は、外集団の人との相互の役割関係を理解することで、高次な集団の再構築により導かれていた。

上記の結果は、Allportの外集団との接触は偏見を低減させるという接触理論を支持するものである。また、Pettigrew (1998) の偏見低減の「脱カテゴリー化」「カテゴリーの顕在化」「再カテゴリー」の段階説を補完する、マイクロ（心理）、メゾ（状況）、マクロ（社会・制度）レベルを含めた要因関連の一部を明らかにした。

偏見が低減するためには、「外集団の理解」が必要である。「外集団の理解」の促進要因は「マクロな視点からの国や制度の理解」であった。インドネシア人看護師・介護福祉士候補者がどのような制度的枠組みの中で来日したか、背景となる国家間関係や両国の医療事情を理解した上で、候補者が国家試験合格を目指し頑張っていると理解することで、受講生の候補者への偏見が低減した。

「外集団の理解」により、偏見が崩され「脱カテゴリー化」につながるためには、外集団

の個人への「肯定的な情動体験」が重要になってくる。これまでの先行研究でも情動の役割の重要性が指摘されていたが(浅井,2008; 長谷川, 2005; Pettigrew, 1997)、本研究でもそれを追認した。「肯定的な情動体験」は、対象者の表情や行動など外見の好印象からも得られた。非言語の情報は、むしろステレオタイプや印象形成の影響要因として指摘されることが多かったが、偏見低減のプロセスに関与する。本研究のように一度の接触場面では特に重要になる。

「再カテゴリー化」は、内集団と外集団の境界を溶解・消滅させ「私たち」という上位のカテゴリー生成させる概念であるが、これには内省の活発化が求められる。とくに外集団の人に対し「自身の過去や現在の体験を比較」して理解しようとすることで共感が高まる。そのような共感から、相手と自分がどのように相互に関わりあっているか「役割関係」が見出され「再カテゴリー化」が進む。デュルケーム(1960)は、人間同士の絆を深めるのは、類似性だけではなく、相違性も重要であると指摘している。たとえば親と子ども、店員と客のような相互関係なしには社会は存在しない。看護師と受講生も、ケアする人、ケアされる人という相互の役割関係の認識をすることで、社会に共に生きる仲間という高次な集団カテゴリーの再構築が可能となった。

本研究からいえる異文化コミュニケーション関連領域の教育への示唆は2つある。まず、偏見の低減プロセスを促進する教員、及び、資料提示の重要性であろう。本研究では、授業実施にあたり教師がゲストと複数回話し合い、パワーポイントを共に作成した。ゲストの情報をできるだけ詳しく収集し、授業で具体的に提示すること、さらに情報の多様性にも気を配ることが重要である。第二にゲストプログラムの効果が確認できたことである。文化に関わるステレオタイプや偏見を扱う授業では、ビデオ教材やシミュレーションゲームによる有用性が多く議論されてきた。これらのメリットは、疑似体験を通しての情動体験が可能だということであるが、異文化の人と直接に接触をするわけではない。ゲストプログラムは、実体験としての接触であり、それだけ情動へのインパクトにリアリティがある。シミュレーションと並行して、ゲストを招き実際の文化移動の事例を紹介することは有用であろう。

本研究で扱ったのは1回の授業であったが、偏見低減に向けてのカテゴリー再構築の芽が認められた。日本の看護師・介護福祉士不足の状況下、日本人のために働こうと国家試験合格を目指して頑張るインドネシア人候補者を受け入れていくべきと考えた受講生は少なくなかった。日本社会にとって必要な人々という気づきは、共にサポートしあう仲間としての認識への第一ステップであるといえる。しかし、授業の1回で終わらせるのではなく、シリーズの講義で偏見の学びをする試み(加賀美・守谷・村越・岡村・黄・富田, 2012)、同じゲストと複数回接触して偏見の低減過程を長期的にみる試み、大学生が偏見を被っている人々の問題を解決する案を考え実施する(アクションリサーチ)など、偏見低減についての長期的な実行とその効果について今後検討する必要がある。

本研究の結果は、条件限定の中の一つの事例であり、すべての日本人大学生、また日本

人に一般化はできないかもしれない。しかし、インドネシア人看護師・介護福祉士を受け入れる日本人スタッフ、患者とその家族の受け入れ態度を理解する一助になるであろう。また、本研究では、イスラム教に対する眼差しは肯定的であったが、米国や英国など西欧の国々とは異なる (Sartawi & Sammut, 2012)。宗教に関心が薄いといわれる日本社会におけるイスラム教に対する態度と、候補者自身の宗教実践についての実態や意識についても今後も検討していく必要がある。

注

- 1 2013 年度実施の看護国家試験では、候補者には試験時間を一般受験者の1.3倍に延長された。問題用紙には全ての漢字に振り仮名を付けられ、一般受験者用の問題用紙も併せて配布された。

引用文献

- Allport, G.W. (1954). *The Nature of Prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley, (原谷達夫・野村昭訳 偏見の心理 上下巻、培風館, 1961.
- 浅井亜紀子 (2008) 大学生のALTステレオタイプ低減過程に関する考察 ―グローバル教育の効果と課題, 研究紀要カリタス, 42, 33-47.
- 浅井亜紀子・宮本節子 (2011) 日本・インドネシア経済連携協定による看護人材受入れをめぐる組織コミュニケーション―政府間における意味生成と共有過程に注目して― 多文化関係学, 8, 17-33.
- 浅井亜紀子・箕浦康子・宮本節子 (2011) EPAインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の日本体験―マイクロ・マクロ連携モデルの視点から― 学術の動向, 17 (2), 83-90.
- 安里和晃 (2010) インドネシアの送り出し政策 外国人労働者問題をめぐる資料集 笹川平和財団, 134-154.
- Brown, R. (1995) *Prejudice: Its social psychology*. Oxford: Blackwell Publishers, (樋口捷久・黒川正流 (翻訳) (1999) 偏見の社会心理学 北大路書房)
- Cook, S. W. (1985) Experimenting on social issues: The case of school desegregation. *American Psychologist*, 40, 452-460.
- Durkheim E. (1960) *The Division of Labor*, Glencoe, IL: Rutgers Univ., NJ: New Brunswick.
- Glaser, B.G. & Strauss, A.L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, New Jersey: Aldine Publishing Company. (後藤隆・大出春江・水野節夫 (翻訳) (1996) データ対話型理論の発見―調査からいかに理論をうみだすか 新躍社)
- 長谷川典子 (2005) 対韓イメージの質的研究 ― ドラマ視聴が生む心理的变化の考察 ― 異文化コミュニケーション, 8, 67-86.
- 加賀美常美子・守谷智美・村越彩・岡村佳代・黄美蘭・富田裕香 (2012) 大学における偏見低減のための教育実習とその効果 多文化社会の偏見・差別：形成メカニズムと低減のための教育 (加賀美常美子・横田雅弘・坪井健・工藤和宏 編著) 明石書店, 124-149.
- 抱井尚子・稲葉光行 (2011) ミックス法 コミュニケーション研究法 (末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 編著) ナカニシヤ出版, 199-213.
- 木下康仁 (1999) グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生 弘文堂

- 厚生労働省 (2013) インドネシア人看護師介護福祉士候補者受入れについて, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/other21/> (2013.11.7).
- 宮本節子・浅井亜紀子・箕浦康子 (2011) EPA 看護師の職場体験とアイデンティティ：過去と現在の対比の中で, 日本社会心理学会第52会発表論文集, p.2.
- Osgood, C.E. (1964) Semantic Differential Technique in the Comparative Study of Cultures, *American Anthropologist*, 66 (3), 171-200.
- Pettigrew, T.F. (1997) Generalized intergroup contact effects on prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 173-185.
- Pettigrew, T.F. (1998) Intergroup contact theory, *Annual Review of Psychology*, 49, 65-85.
- Sartawi, M. & Sammut, G. (2012) Negotiating British Muslim Identity: Everyday Concerns of practicing Muslims in London, *Culture & Psychology*, 18 (4), 559-576.
- 山本克也 (2009) 我が国における外国人看護師・介護士の現状と課題 季刊・社会保障制度, 45, 258-268.
- 付記：**本研究は、科学研究費「グローバル化とIT革命がもたらす異文化体験の変容：アジア系医療従事者の事例」(挑戦的萌芽研究 課題番号23653172 H23-25) (宮本節子：研究代表者、浅井亜紀子：研究分担者) の資金を一部得て実施した。